地域と共生するFFG

株式会社 御花（おはな）

取引店：福岡銀行 柳川支店

立花家18代・代表取締役社長

立花（たちばな） 千月香（ちづか） 氏

立花家の末裔が守り続けてきた「日本で唯一泊まれる国指定名勝」が2025年1月リニューアルオープン

7,000坪の敷地全体が国指定名勝となっている「柳川藩主立花邸 御花」。約300年の歴史を持つ文化財でありながら、1950年からは料亭旅館として親しまれてきました。そして75周年を迎える2025年1月、「100年先も変わらない質朴な空間」をコンセプトに宿泊棟が新しく生まれ変わりました。

立花家の末裔が営む「日本で唯一泊まれる国指定名勝」を守り、100年後も残していきたいと語る立花家18代の立花千月香氏。今回のリニューアルへの想いや、長年守り続けてきた歴史や文化という強みを活かした新しい空間やサービスについてお話を伺いました。

柳川を愛し、共に歩んできた立花家の歴史

立花家の初代は、南北朝時代にこのあたりを治めていた大友家の家臣、戸次（立花）道雪です。この道雪が筑前国（現在の福岡）の立花城の城主になったことで「立花」の姓が始まります。その娘・誾千代と結婚して道雪の婿養子となった戦国武将で知られる立花宗茂が、豊臣秀吉に大名として取り立てられ、1587年に柳川城に入ったことから柳川立花家の歴史が始まります。

柳川藩主として信頼が厚かった宗茂ですが、関ヶ原の戦いでは西軍側についたため領地を追われました。しかし、その武功や人柄が徳川幕府に認められ、柳川藩主として復活。関ヶ原の戦い以降、領地を追われた後に旧領を回復できた大名は宗茂ただ一人です。

以来、立花家は柳川を愛し、柳川と共に生きてきました。江戸時代中期の5代・立花貞俶は、家族が住まう別邸として現在の御花の場所に屋敷を建てました。この地が季節の花々で彩られたことから「御花畠」の愛称で親しまれ、後に「御花」となったのです。

明治時代になると立花家は伯爵位となり、1910年には14代当主立花寛治が現在の「御花」の基礎となる邸宅を整備しました。同年に生まれた16代・立花文子は、大正、昭和と激動の時代を生き抜きます。戦後は旧華族が困窮する中、夫である和雄とともに料亭旅館を営むことを決意。元々広間を地元の人々の宴会場として提供していたことがきっかけで、これまで想像もしなかった経営者としての道を歩み始めることになったのです。

「絶対にへこたれない」曾祖父と祖母の想いを継ぐために

文子と和雄は私の祖父母に当たります。祖母は伯爵家のお嬢様として何不自由ない暮らしから一変したものの、とても明るく前向きな人柄でした。幸いにも屋敷にはご奉公の女性が多くおり、その方たちが仲居として働き、有田焼の器なども揃っていたことが功を奏したようです。

その祖母からは「これからどんな時代になろうとも、絶対にへこたれるな」と教えられてきました。この言葉は文子の父・立花鑑徳が残した教えで、その意志は世代を超えて私へと受け継がれています。その後、柳川の観光の定番である「柳川 川下り」も始まります。当時よく地元の人たちと舟で宴会をしていたことから、これが観光化できるのではないかと始まったものです。さらに料理も、家庭料理と考えられていた有明海のものを使った郷土料理を提供。祖父は初代の柳川の観光協会会長も務め、常に「柳川のために」との想いで次々とアイデアを出しており、今は有名な柳川の白秋祭もこの頃に生まれました。

今では柳川は国内外で知られる〝観光地〟ですが、その魅力は決して作られたものではなく普段の暮らしや風景を感じられるところだと思っています。川下りをされると気づかれると思いますが、家にはお堀との間をへだてる塀がありません。それだけに人々のありのままの暮らしを感じることができる、舟に向かって子どもたちが「こんにちは」と挨拶をする、そんな日常の風景がずっと変わらずに感じられることが、柳川の魅力なのだと感じています。

御花の歴史と魅力を語る立花社長

「国指定名勝に泊まる」唯一無二の強みを活かして

今回リニューアルをした宿泊棟「松濤館（しょうとうかん）」は、40年前に建てられたものです。江戸時代中期から約300年を経ても変わらない「松濤園」の美しい庭園を眺めるお部屋ではあったものの、客室数はわずかに20室。「御花って宿泊できるのですか？」と聞かれるほど、あまり知られた存在ではありませんでした。私たちも結婚式や宴会などが中心で、宿泊の売り上げは1割程度に過ぎませんでした。

その経営状況がコロナ禍で一変します。全ての観光が自粛ムードの中で、なぜか宿泊だけが動いていたのです。いらっしゃるのは福岡や北九州のお客さまで、せめて非日常を味わいたいと宿泊されていました。

これを機に、私たちも宿泊の見直しを行いました。実は柳川には宿泊施設が限られておりビジネス

1

2

4

3

1.守りたい景色のシンボルとなっている100畳の大広間／2.3.特別室 黒松／4.柳川の郷土料理を提供

5.客室から眺めた風景の一例（文化財ビュー）／**6.**客室前の廊下には立花家と所縁のある展示品が飾られている／**7.**深川製磁のティーセット

利用される方も多かったのですが、駅前にビジネスホテルができ、私たちはより高付加価値のある宿泊施設に舵を切ることにしました。

「御花」の持つポテンシャルについて考えた時に、出てきた答えが「文化財に泊まる」というキーワードでした。庭園を含め7,000坪の敷地全体が国指定名勝の文化財となっています。さらには柳川を治めてきた立花家の末裔が営んでいる料亭旅館であることの価値を、いまさらながら実感したのです。そして何よりも私たちには「100年後に残す文化財を守る」役割があることを自覚し、「変わらないために変わること」の大切さに気づいたのでした。

料亭旅館を創業してから75周年を迎えます。そこで「原点回帰」をテーマに16代・立花文子が書いた「御花」の文字を使用し、立花家が受け継いできた歴史・ストーリーを感じていただけるよう全客室、ロビー・ラウンジなどをリニューアルしました。

歴史を感じるおもてなしの空間へ リニューアルオープン

2024年夏からリニューアルを進め、2025年1月11日に無事リニューアルオープンを迎えることができました。客室数は20室と変わりません。しかし、一つひとつのお部屋が広くなり、ロビー・ラウンジともにおもてなしの空間として大きく変わりました。コンセプトは「100年先も変わらない質朴な空間」。100年先も変わらない上質かつ普遍的な温かみ、経年変化を楽しめる自然素材や元々御花の屋敷で使われていた布石（ぬのいし）を石畳やオブジェとして使用しています。

また、至るところに地域や歴史的につながりの深いものを採用しています。照明には八女市・伊藤権次郎商店の提灯、透白磁に描かれた「フカガワブルー」と呼ばれる品格ある青が印象的な深川製磁のティーセット、ロビーやラウンジの家具には佐賀市諸富町で60年以上の歴史を持つレグナテック社の「ARIAKE（アリアケ）」シリーズなどを採用。客室のアメニティー一つひとつにも、地元と縁のあるものを選んでいます。

客室は江戸時代の庭園の名残である東庭園を眺めるガーデンビューと、松濤園や西洋館などの文化財エリアを眺める文化財ビューのお部屋を用意しました。文化財側はこれまで眺めることができなかったのですが、今回こちら側を眺める客室ができたことで迫力ある歴史ある建物、そして遠くは雲仙岳をも眺める絶景をお楽しみいただけるのではないかと思います。

歴史や柳川を楽しむ新サービスも登場

立花家や柳川の歴史や文化を感じていただくサービスも始めました。ご宿泊のお客さまには毎日16時半から館内ガイドツアーを実施しています。立花家の歴史を含め「御花」の魅力を存分に見て、聞いて、感じていただける内容となっております。

更に「お舟で朝食」もスタートしました。川下りの開始が朝9時ですので、その前の静かなお堀で優雅な気分で朝食を楽しんでいただけると思います。ラウンジにはブックコーナーも常設。「四季を紡ぐ」「伝統文化を紡ぐ」「歴史を紡ぐ」などをテーマに、ラウンジや客室でゆっくりと読書をしていただければと思っています。

「御花」は日本で唯一泊まれる国指定名勝です。その文化財を守り、お客さまに楽しんでいただくことはサステナブルな社会への貢献にもつながっていくはずです。文化財の魅力を見出し、訪れる方々に感動を届け、「心のよりどころ」としてあり続けること、それが私たちの使命であると感じています。

ラウンジのブックコーナー

株式会社 御花

■所　在　地：福岡県柳川市新外町

■電話番号：0120-336-092（代表）

■設　　立：1950年

■事業内容：宿泊業、ブライダル事業、飲食業

客室情報はこちら

ホームページはこちら

松濤館